

生涯にわたって
社会のいたるところで学ぶための方法序説

中央区区民メディアリポーター 実践10年、「想い」をふりかえる

安西 春樹

提案：長いスパンの「ふりかえり」で活動実践の「初心」や「目的」、「未来」を確認しあってはいかがでしょうか

はじめに

どのような団体や事業、活動でも、長く続いていく内に、多かれ少なかれ人が変わり、内容が変わり、当初の「想い」や「目的」がだんだんと薄れてしまうことがあります。

周年という節目をきっかけに「初心」を思い起こすことで、現在の課題解決や、「未来」の活動発展につながる「ふりかえり」を試してみたいかがでしょうか。

社会教育は往々に「ふりかえりと実践！」と語られます。本稿では、はじまりから10年を迎える中央区区民メディアリポーターの活動を振り返ることで「未来」を思い描く材料にしたいと思えます。

中央区

区民メディアリポーター

私の勤務する中央区の生涯学習

事業「中央区民カレッジ」では、「学んだことを地域に生かす」を目標にさまざまな学習講座を開催しています。

その中で各年度に生涯学習サポート養成コースを設け、地域活動につながるボランティア養成講座を実施しています。

本稿で紹介する中央区区民メディアリポーター（以下メディアリポーター）は、2012年度から2年間、区の養成講座を受講し修了したメンバーで「中央区区民メディアリポーターの会」（以下MR会）を立ち上げ、現在も活動を行っています。

《行政がカバーできない区民が求める地域情報》をキーワードに地域の「ひと」、「モノ」、「出来事」にスポットを当て、《区民目線で》取材をし、情報番組を制作するという情報発信のボランティア活動です。

取材交渉から写真、動画の撮影、ナレーション原稿の作成と収録、補足テロップも含めての動画編集、出来上がった作品の視聴と手

直し、放送に乗せるための調整：とすべてを自前でを行っています。

東京都中央区・江東区の地域ケーブルテレビ「東京ベイネットワーク株式会社」（以下、ベイネット）の協力のもと、月替わりで1日3回の放送枠を確保していたが、2014年4月から作品を放映しています。

MR会では、2022年1月末の時点で、延べ172作品の放映を行ってきました。また、放映された一部の作品は、YouTubeにアップして、どなたでも視聴できるようにしています。ご興味のある方は、ぜひ制作作品を視聴ください。



中央区区民メディアリポーターの会
blog

活動のきっかけとなった養成講座では、東京大学大学院の水越伸教授と同水越研究室の大学院生に協力をいただき、写真とナレーションにより短い映像ストーリーを

制作するデジタル・ストーリーテ

リングの手法を用いて、参加者同士が学び合いながら作品を創り上げていくワークショップ、「メディア・コンテ」を実践していきま

した。
人によつては、初めて手にする機材もあり、試行錯誤の連続だったようです。ただ、デジタル機器は苦手でも、水越教授の「声なき想いをものがたりに紡ぐ」ことで市民自ら地域のメディアを育てていくという熱い想いやメディア論に引き寄せられて、講座終了後にMR会を立ち上げるに至りました。

その後、会員の脱退や、2017年度開催の養成講座を修了した二期生との合流、視聴者を広げるための工夫、出張上映会やブログの開設、YouTubeへの投稿など様々な経験を経て現在の活動に至っています。

今回、MR会設立のきっかけとなった養成講座から今までの約10年をそれぞれの立場で振り返る機会を設けましたので、その様子を

紹介させていただきます。

中央区区民メディアリポーターの活動をふりかえる（座談会）

2022年2月某日、普段は月に一回、翌月、翌々月放映予定の作品のチェックや、今後の制作スケジュールなどを確認する定例会を行っていますが、別途、今までの活動を振り返る座談会を開催しました。
座談会メンバーは、養成講座一期生で代表の阿部幸一郎さん、副代表の墨谷礼子さん、二期生からは、長坂恵美さん、山本三知子さんに集まっていたいただきました。

○養成講座受講・活動参加のきっかけや活動しての気づき

安西 皆さんは、ボランティア養成講座を受講し、修了したわけですが、きっかけや「想い」はどのようなことでしたか？

阿部 はじめは今までやってきたことの経験値が活かせるかなというのがありました。でも、「伝えたいことを伝える」というのは難

しかった。テーマを見つけて、写真を撮え、文章を作り、ナレーションを入れるというのはやったことがなかったもので、特にナレーションは失敗したらまた最初から感じてできつかったですよね。そういう面で勉強になりました。

墨谷 還暦を迎え、子どもたちも大学を卒業して方向も決まり、母としての役目が終わった時期でした。そして自分を高めたいという想いがありました。家族のためから、今度は自分のために何かしたい、地域に役に立つことをしたいという想いがあり、それがボランティアだと思いました。

地域のお掃除や町会活動などして、色々「これかな」とか悩んでいた時に、区民カレッジのチラシを見て、テレビの裏側というか、制作の現場というのを見てみたくて講座を受けたのがきっかけでした。

受講してみて困ったことは、皆さんのレベルが高くて、おっしゃっていることもすごいし、パパッと出来ちゃうんです。私はパソコン

をやつと使えるくらい。マイク持って話すのも恥ずかしくて、隠れながら録音したりしていました。
安西 一期修了生でMR会を立ち上げ、活動に移っていったのですが、その後、家の事情だったり、方向性が違ったりして人数が減った時期がありました。そこで新しい人にも入っていただき、活動を活性化したいということもあり、区民カレッジで養成講座の第二期を開催しました。2017年のことです。

第二期では、目白大学の溝尻真也先生に市民メディア論の講義をお願いし、また、技術面に特化した講習をベイネットの協力のもと進めました。

長坂さん、山本さんは、この二期生ですが、振り返っていかがですか。

長坂 結構大変でした。区民カレッジの情報は、山本さんから教えて頂いて一緒に講座に参加しました。難しいなと思いつながら通っていたのを覚えています。はじめに

お互いの他己紹介作品を作ったと思います。

山本 そうでした。他己紹介は、長坂さんとペアで、知っている仲間だったし話を聴くのも楽しかった。もともと高校時代の友達だったので。

安西 お二人はもととお知り合いだっただけですね。今、初めて明かされる事実(笑)。

山本 そうですよ、こういう話をする事なかつたですものね。

なかなか一人で受講するのは勇気がいることだったので、一緒に受けて、「今日、行くよ」と声を掛け合いながら修了するところまでがんばりました。やっぱり友達同士で受けたというのが大きかったと思います。

長坂 あと、養成講座中に一期生の方がよく声をかけてくださって、迷ったり、分からなかったところをフォローしてくれたことでホッと続けられた部分もありました。

山本 私が最初に作った作品は、東証に勤めている方に取材した記

憶があります。ナレーションがものすごく早口になってしまい、当時はまだ見る側、聞く側の立場に立たずに、とにかく時間内に収めようとしていました。

長坂 私は、図書館をテーマにした作品でした。写真が少なかつたので、もつと沢山撮って入れ込めば良かったな。情報が少なかつたように思います。

ただ、最初の作品は、今でも印象深く覚えています。写真の許諾についてもすごく苦労した部分でした。

安西 講座を修了してMR会に合流したのですが、入ってみて、「こんなはずじゃなかった」というような思いもあつたかと思えます。なにか思うことありましたか？

長坂 自分の中では、最初の作品を作るまでが苦しかったなと思います。企画書を作って先方に伝え、取材の依頼をして…それから制作。チェックをして修正してを何度も繰り返し、かなり大変でした。会社が終わってから夜中に作業する日々が続いていました。

そんなところも含めて、活動をしていて良かったなと実感できることはありましたか。

阿部 よくあるのは、「阿部さん、この前見たよ」と声をかけられること。

墨谷 嬉しいですよ。私も水越先生の「ひと」をクロージアップしての作品作りというのが最初のテーマだったので、やっぱり「ひと」かなと思っています。

「ひと」なんてだけでも、良く知らないで引き出すのが難しいとも感じます。月島の商店街で年中買い物しているの、お米屋さんとか、ボンちゃん(リクガメ)のいる葬儀屋さんとか、金物屋さんとか、瀬戸物屋さんとか…とっかかりとしてお店の方に取材をしてきました。

瀬戸物屋さんに取材を頼んだ時に、はじめの構想は瀬戸物の話が引き出せるかなと思つたら、「僕が商店街のアーケードを全国に視察に行つて作ったんだよ」という話が聞けて、そこにビビッと来て、テーマを引き出すことができたん

の付き合いは良いものだというのはわかつてはいるけれども、今のマシオン生活の中ではなかなか難しい。

だからこそ、MR会の活動を通じてつながりを持てればいいなと思つています。実際、作品制作を通して何人か新しいつながりも持てました。

安西 阿部さんの作品だと、「祭」をテーマにしたのがありましたよね。それこそ、「つながり」だらけだつたと思えますが。

阿部 以前に撮影で知り合った方からの紹介で、地元の祭を記録に残してほしいという要望もあり取り組んだ作品でした。たとえば神輿をくみ上げるまでにどういう組織があつて、どんな段取りでというような。結局、十何時間の素材を5分に収めるのが大変でした。

安西 つながりづくりは大切だと分かつていてもなかなか作れない。でも、こうした活動を続ける中で、地域社会とのつながりが自然とできてくるのも活動として大切なのだと思います。



1期生 阿部幸一郎さん
趣味と実益を兼ねて、ビデオ撮影・編集を30年来続けている。水泳では日本マスターズ水泳協会に登録、競技会に参加。



1期生 墨谷礼子さん
中央区在住60年。息子さん2人の4人家族。趣味はガーデニングとオカリナ。

山本 築地本願寺の作品ですよ。

阿部 あの作品はかなり評判良かったですよ。

長坂 その一作でちよつと力尽きてしまったかも(笑)。

山本 私の場合は「ひと」に焦点をあてた作品でしたので、本人にさえ許可をもらえれば良かったので割と大変な思いはせずに済みました。

阿部 相手の組織が大きければ大きいほど、担当者だけでは決められないので、話を持っていくにも技術が要りますよ。

長坂 取材では自分のこと(メディアリポーター)を知られていない方に取材依頼をするのが大変でした。中央区のボランティア活動としてもつと広く知られると楽になるのかなと当時は思っています。

です。水越先生がおっしゃっていた自分の固定観念で作るのではなく、「対面して話をする中でお互いに想いを引き出す」という手法を実感しました。

コミュニケーションを取り合っていくということが、自分も引き出されるし、相手からも想いを引き出せて作品づくりになっていく。その対面のコミュニケーションから生まれるものを原点として活動しています。

安西 取材をしていく中で、気づきや発見が沢山あるんですね。山本さんの作品では自らトレッキング講習の受講生になつて作つたものもありましたよね。

山本 あの時は自分が参加していたので、すんなりと受け入れてもらえて、交渉も難しくなく進められました。ただ、いち受講生だった

その意味で活動自体をたくさんの方に知ってもらうことも大切だと感じました。

阿部 私が一番苦労するのは、逆に「ひと」に焦点をあてること。メンバーによつては深くシビアに取材対象の方とお付き合いされて、ちゃんとその方の重要なポイントを引き出して作品に込めたい。私はどうも得意でなくて、モノとか風景とか催し物に行つてしまふ。自分の生活の中で関わり合う人は、仕事の関係と水泳の仲間くらいで、地域になかなか付き合い合

いがなく、隣の方がどういふ方もわからない生活で、そんな中、地元の情報やピックアップして伝えるという活動は面白いなと思

い、また、社会とのつながりが多くないことにあらためて気づきました。田舎で育つたので、隣近所

たので写真は勝手に撮れませんので、実は素材が少なかつたんです。

阿部 だいたい写真は足りなくなると、制作の際、どのくらい撮るんですか

阿部 量はすごいですね。魚市場の巡回員の作品では、500枚くらい撮つたそうで、使つたのは20枚くらいと聞いています。

安西 写真を選ぶのも大変ですね。



2期生 長坂恵美さん
中央区在住16年。趣味は、海外旅行計画と英会話勉強。今年の目標は、中央区を盛り上げること、英会話の上達。



2期生 山本三知子さん
中央区在住8年。楽しいことが大好き、「とりあえずやってみる精神」で活動に参加。趣味は旅行・パドミントン・ドラム。

思ったのが、長坂さんの築地本願寺の作品。良い日を選んだんですか。

長坂 コンパクトデジカメだったので、天気の良い日を選んで、何日も撮りに行きました。

阿部 最近は光さえちゃんとあればスマホでもきれいに撮れますよね。

安西 素材も大切ですし、自分の中でテーマがしっかりあって、それに沿った構成を持っていることが大事ですね。

墨谷 何を受け取ってもらうかを考えながらですね。

山本 一期からの皆さんはいっぱい作品を作られてるので、テーマを決めるにしても勤が働くというか、ネタに困らないのかなと思うんですね。私は作った作品も少ないだけに、次はどうしようかなと悩んでしまうこともある。

でも、今日、当初どんな目的で活動に入ったかという話をしていたら、どんな作品を作ったのかということのちよつとずつ思い出すことができました。

的を思い返していくことが必要ですね。

阿部 自分自身よそから越して来て、中央区のつながりがないんですね。活動であたらしいつながりを作ればと思っています。

安西 そうは言っても、中央区に新しく来て何年ですか。

阿部 30年です。

安西 新しく来て、30年！(笑)阿部 隣の方、本当に知らないんですよ。会ったら挨拶するくらいで、家族構成も知らない。そんなマンションの暮らしの中で、自分たちは何ができるのかを探っていきたいと思います。

山本 コロナの中ですので、対面での取材はやっぱり厳しいことは確かです。割り切って、「場所」をテーマにしても良いのかなとも思います。

例えば阿部さんの「橋」をテーマにタイムラプスで作った作品。あれは私もすごく好きなんです。見た方がそこに行ってみようというきつかけになったり。

それから、やっぱりメンバーを

安西 続けているとどんどん締め切りに追われたり、何かつくらなきゃという使命感のようなものが生まれてくるのですが、一番最初の想いとか気持ちに立ち戻ることもし時には必要なのかなと思いますよね。

山本 そういう意味で今回の座談会は良い機会だったと思います。

○今後の活動について

安西 さて、きっかけや作品づくりで困った点など話が出ましたが、今、ボランティア団体としての課題、今後の活動についてなども聞きたいと思います。

コロナの状況下、メディアに関わる皆さんは活躍のチャンスと思われがちですが、実は話をできてきたように「ひと」に焦点をあてて対面で取材するところが難しさもあると思います。

墨谷 今、月島のレトロ交番を題材に作品づくりを進めているところです。「ひと」になかなか行き当たらず、どうしようかなと思っていたところ、芝浦工大の志村先

増やせればと思う。最初はチームで制作するのでもいいのかなと思います。でも、ボランティアということで考えると、やっぱり楽しくできることが一番。そういう気持ちで続けていききたい。

阿部 やっぱり好きでないといけないですよ。

山本 良い作品を作るという想いはもちろんですが、それ以上に自分が楽しくできるという活動をしていきたいと思います。

長坂 私は、もともと山本さんに誘われて入ったのですが、中央区が大好きで、港区と千代田区に負けたくないみたいな(笑)。中央区の良さを多くの方に知ってもらいたいという想いで毎回作っています。なので、私の課題は、できればこれからも良い作品を作って、視聴率も上げて、中央区の中に盛り上がりを作りたいと思っています。

それから、メンバーの人数が少なくないと苦しいのは確か。アイデアも人が集まった方が出るし、新しいメンバーを獲得するのも大事で

生の長屋学校で月島地域の映写会をやっていて、見に行ったら、レトロ交番で勤めていたお巡りさんの息子さんという方がいらしたんです。うかがったらご近所の方でした。それをきっかけに取材をさせてもらうことになり、コロナの中ですが、どうにか進められています。さきほど話にあったように、

そういう素性の者かを説明しなくても大丈夫だったので、やっぱりコロナ禍、テーマによっては難しい部分ですよ。緊張らずに身近なものでできたらと思っています。

また、メンバーから定例会をオンラインでという意見もあったのですが、やっぱり対面で情報共有しながらできると良いなと思えます。まずは自分でできる範囲で活動したいです。

阿部 MR会発足のメンバーは、皆すごい個性で、私も定例会に出たくなくなる時もあったくらいでした(笑)。他の人の作品に対して細かいところまで意見を述べるというところがあったって、自分は、

すが、何らかの事情で離れたメンバーに声をかけて、もう一度戻ってきてもらうことも考えたい。

阿部 今、ベイネットとWEB中心ですが、それ以外にも以前に開催したような上映会も増やしていきたいですね。現場ですと、見た方の反応が直接聞けるので、作り手として参考になります。人が集まる場所で定期的にできると良いですね。地に足が付いた活動、人と接する活動をしていきたい。

安西 今年、新しい図書館も開館するので、そこでも活動につながるのと良いですね。外で発表できる場を設けて「ひと」とのつながりを広げていきましょ。

長坂 「ひと」に焦点をあてることも再確認できたので、まずは私たちが阿部さんを紹介する作品を作るのはどうですか。

安西 では、正式に阿部さんに取材依頼を出してみなさんで作りましょ(笑)。

○座談会を終えて
今回、座談会という形で、一部

会の趣旨に合っていればそれぞれで良いのではと思うことが多々ありました。

今、会員が減っていったのはなにかと考えると、目的が曖昧になってきた部分もあるのではと感じています。会の目的というかアイデンティティーが不明確になっていること。だから、先ほど初期の作品を見返してみても「ああ、そういうことだったよな」と作品づくりの目的を思い出すことは良いことですよ。

今後は、当初の目的を思い返して、本当の意味で地域に密着した内容で実践していく努力も必要ですね。

安西 ベイネットさんも含めて一般のテレビ局が作るものと自分たちの活動の違いをあらためて確かめることも必要ですよ。地域の情報を区民目線でどう捉え、どう伝えるかを考えることが重要になってきていると思います。

自分の目で見て、自分で考えをまとめて発信していくことはベラスとして続けて、たまにはその目

の会員ではありませんが活動を振り返る機会を持ちました。

やはり現状の「確認」と、活動実践や締切に追われて置いていきがち「初心」を思い出すことは大切なのではないかと感じました。

今回紹介したMR会に限らず、活動実践の中で途中から合流して一緒に活動する人が増えていくなど、新しいメンバーが加わる際にお互いを知らないことが要因となり小さな溝ができることも考えられます。

せっかくの活性化の機会にお互いの齟齬が生まれてはもったいないことです。そのためにも活動を振り返る機会を設け、それぞれの「初心」「想い」を確認して共有することは有意義なのではないでしょうか。

安西春樹
(あんざい・はるぎ)
中央区区民部文化・生涯学習課
総括生涯学習指導員